様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００５２２

研究課題名（和文）中国東南方言の事態把握に関する実証的研究

研究課題名（英文）Cognitive and Empirical Research on Dialects of Southeast China

研究代表者
佐々木　勲人（Sasaki, Yoshihito）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：４０２５０９９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国東南地域の諸方言の言語データを詳細に調査・分析することを通して，近年の認知言語学の成果によって研究が進んでいる事態把握の問題に関して、中国語の特徴を明らかにした。
中国語は客観的事態把握を好む言語であるといわれるが，その傾向は官話と呼ばれる北方方言においてとくに顕著であることが明らかとなった。北方方言では，話し手は事態の外に身を置いて，傍観者ないし観察者の視点から事態を捉える客観的事態把握を好む傾向が見られるのに対して，東南地域の諸方言では，話し手は事態の中に身を置いて，体験者の視点から事態を捉える主観的事態把握を好む傾向が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
東南方言の受動文や使役文、処置文といったヴォイスに関わる言語現象について新たな知見を得られたことは本研究の成果である。また、当該現象の分析を通して、東南方言の事態把握が、北方方言とは異なることを実証的に明らかにすることができた。広大な国土に様々な方言が存在する中国語は、地域ごとに異なる性質を備えていることを事態把握の分析を通して明らかにすることができた。方言文法研究の有用性を示すと同時に、中国語の多様性を示すことができたことも本研究の大きな成果である。

研究成果の概要（英文）：Through detailed investigation and analysis of linguistic data from various dialects in southeastern China, this study clarified the characteristics of Chinese language with regard to the problem of construal, an issue that has been the subject of much research in the field of cognitive linguistics in recent years.
Chinese is said to be a language that favors an objective construal, and it has become clear that this tendency is particularly evident in the northern dialect known as Mandarin. In northern dialects, speakers tend to prefer an objective construal, placing themselves outside of the situation and viewing it from the perspective of a bystander or observer, whereas in southeastern dialects, speakers tend to prefer a subjective construal, placing themselves within the situation and viewing it from the perspective of someone who has experienced it.

研究分野：言語学

キーワード：中国東南方言　事態把握　主観的事態把握　客観的事態把握　ヴォイス　主題化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の認知言語学の研究成果によって，事態把握に関する中国語の特徴がさまざまな観点から明らかにされている。しかし，それらは何れも北方方言を基礎とした“普通話（標準語）”のデータに基づいた分析である。東南地域の諸方言では，北方方言とは異なる事態把握に基づく言語表現が用いられるという事実が看過されてきた。

２．研究の目的

本研究の目的は，中国東南地域の諸方言の受動文や使役文、処置文といったヴォイスに関わる言語現象の分析を通して、東南方言の事態把握に関する特徴を解明することにある。

３．研究の方法

本研究は，中国東南地域の諸方言の事態把握の特徴を明らかにするために，最新の認知言語学の成果を取り込みながら，比較方言文法の手法を用いて分析を行った。

４．研究成果

中国語は客観的事態把握を好む言語であると言われるが，その傾向は官話と呼ばれる北方方言においてとくに顕著である。北方方言では，話し手は事態の外に身を置いて，傍観者ないし観察者の視点から事態を捉える客観的事態把握を好む傾向が見られる。これに対して，東南地域の諸方言では，話し手は事態の中に身を置いて，体験者の視点から事態を捉える主観的事態把握を好む傾向があることが明らかになった。

本研究の具体的な成果は以下の５点である。

１）呉語のヴォイスに関する分析

一般に，東南方言では処置文の使用頻度が低いと言われているが，呉語に属す紹興方言も例外ではない。調査によって、紹興方言の処置文は不如意な事態に限って成立することが明らかになった。このような制約がどのようにもたらされたのか、そのメカニズムを検証した。紹興方言の授与動詞“搬”は，受益者を導く機能を備えているという点において，他の東南方言と異なっている。その使用範囲は，代替行為の受益者にまで拡張していることから，標準語の授与動詞“給”よりもさらに高度な文法化を遂げていることを指摘した。また，他の東南方言と比較しつつ、受給者を導く機能が授与使役，放任使役を経て受動へと至る“搬”の文法化のプロセスを明らかにした。

２）客家語のヴォイスに関する分析

一般に，東南方言では処置文の使用頻度が低いと言われているが，客家語もその例外ではない。しかしながら，同じ客家語の中でも，台湾四縣方言のように処置マーカーが確立している地域と，福建連城方言のように処置文がほとんど使用されない地域がある。このような使用条件の違いが何に基づくものなのか、そのメカニズムを検証した。処置文は動作行為の対象を前置によって動詞句の前に表示する構文であるが，当該構文を使用しない地域では，対象を文頭に表示するいわゆる受事主語文の形式が多用されることが明らかとなった。受事主語文の多用は，受動文の使用頻度とも関連する問題であり，客家語のヴォイス体系の中で，処置文や受動文，受事主語文がそれぞれどのような役割を担っているかを明らかにした。

３）客家語および閩語の処置文と受事主語文に関する分析

東南方言では処置文の使用頻度が低いといわれているが，客家語や閩語のデータを詳細に分析すると，その使用条件は地域によって必ずしも同じではないことが明らかとなった。使用条件を左右している原因は何かについて，事態把握の観点から分析を行った。また，処置文の使用頻度が低いのとは対照的に，これらの地域では対象を文頭に表示する受事主語文が多用される。各地のデータを詳細に分析すると，その使用条件にも地域差が見られることが明らかとなった。客家語や閩語のヴォイス体系の中で，処置文や受事主語文がそれぞれどのような役割を担っているかについて解明した。

４）客家語と粤語の処置文と受事主語文に関する分析

東南方言では一般に処置文の使用頻度が低いといわれているが，客家語や粤語では特にその傾向が顕著である。これらの地域のデータを詳細に分析すると，その使用条件は地域によって必ずしも同じではないことが明らかとなった。使用条件の違いは何によるものなのか，事態把握の観点から分析を行った。また，客家語や粤語では受事主語文が多用されることが知られている。動作行為の対象を文頭に表示するこの種の構文が多用されることと，処置文の使用頻度が低いこととの関連を各地のデータに基づいて分析した。その結果，受事主語文の使用条件にも地域差が存在することが明らかとなった。

５）処置文と受事主語文に関する北方方言と東南方言の差異に関する分析

東南方言では処置文の使用頻度が低いといわれているが，各地のデータを詳細に分析すると，その使用条件にはかなり違いがあることが明らかとなった。また，処置文の使用頻度が低い地域

では，それに代わる形式として，SSV 型の受事主語文が多用されることも明らかとなった。北方方言では成立し難いといわれる SSV 型の受事主語文が東南方言において多用されることと，処置文の使用頻度が低いことには，事態把握の違いに関わる構文的な関連があることを各地の方言データに基づいて実証的に明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 佐々木勲人	４．巻 24
２．論文標題 東南方言における事象叙述と主題化―“把”構文と主題文をめぐって―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 現代中国語研究	６．最初と最後の頁 30-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐々木勲人	４．巻 12
２．論文標題 非情の受身と間接受身	５．発行年 2022年
３．雑誌名 漢日対比研究論叢	６．最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Sasaki, Yoshihito	４．巻 1
２．論文標題 Pictograms and Japanese Construal in Cognitive Linguistics	５．発行年 2020年
３．雑誌名 The Asian Conference on Arts & Humanities 2020 Official Conference Proceedings	６．最初と最後の頁 209-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐々木，勲人；千葉謙悟；野原将揮；戸内俊介；石崎博志；池田晋；八木堅二；鈴木慶夏	４．巻 5
２．論文標題 《日本中国学会報》第71集《学界展望（語言学）》	５．発行年 2020年
３．雑誌名 古代文学前言与評論	６．最初と最後の頁 32-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐々木勲人，樊暁萍	４．巻 2020
２．論文標題 紹興話的処置句和被動句	５．発行年 2020年
３．雑誌名 現代中国語研究(2020年版)	６．最初と最後の頁 173-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 佐々木勲人，千葉謙悟，野原将揮，戸内俊介，石崎博志，池田晋，八木堅二,	４．巻 266
２．論文標題 学界展望	５．発行年 2019年
３．雑誌名 中国語学	６．最初と最後の頁 174-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐々木勲人，樊暁萍	４．巻 20
２．論文標題 紹興話的処置区和被動句	５．発行年 2018年
３．雑誌名 現代中国語研究	６．最初と最後の頁 154-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 佐々木勲人，樊暁萍	４．巻 20
２．論文標題 論紹興話給予動詞“撥”的語法化	５．発行年 2019年
３．雑誌名 論叢　現代語現代文化	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 佐々木勲人他	4．巻 265
2．論文標題 学界展望	5．発行年 2018年
3．雑誌名 中国語学	6．最初と最後の頁 113-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 佐々木勲人
2．発表標題 ヴォイス構文の日中対照
3．学会等名 漢日対比語言学会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Sasaki, Yoshihito
2．発表標題 Pictograms and Japanese Construal in Cognitive Linguistics
3．学会等名 The 11th Asian Conference on Arts & Humanities（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 佐々木勲人
2．発表標題 事態把握からみる中国語と日本語
3．学会等名 高端外国専家引進計画（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 佐々木勲人
２．発表標題 事態把握からみる日本語と中国語
３．学会等名 「言語と情報研究プロジェクト」第77回公開セミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐々木勲人
２．発表標題 日本語の視点，中国語の視点
３．学会等名 第10届漢日対比語言学検討会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関